

第二号

四月二十七日発行

東大斗争
獄中書簡

体制はゴジされたぞ

朕（加藤）はたらふく食つてゐるぞ
匪賊共闘ムショで死ね

ギヨメイギヨジ

四

次

東 拘 よ り

菊屋 橋 一〇一號

たつた今、接見を済ませたばかりのところです。いつのときでも友人と会うのは楽しいことです。

今こうして、現実的な斗争の場から引きはなされて、天井と屏ばかり閉された空間に座っていると、不思議と過去のことを想い出します。何故／いつから／こんな風になつたのか……と。私が“憎悪”を、ある種の人や物に対して懷くようになつたのは……いつからなのか。何がそうさせるのか。本来“憎む”ことに程遠い“温和”を“愛している”（と自分で感じている）私がなぜ、一方で“温和”そのものを“憎んで”しまうのか。そなくせ私が自己を表現しようとすると、いつも、誰よりも

“温和”な形をとっている。（こんどの斗争を除いては……。）おそらく、私の人生が、外観する限り、何しても中途半端の印象を与えるのは、精神に内在するこのアンビバレンツを止揚できずについたからでしょう。

およそ、古典的といえるような特質、優美、繊細、きやしゃ、小づくりな上品さ、とかに、一方では“頭からアルコール漬け”になり、他方では“体で拒絶して”身動きできなくなるのが、私のつねでした。美しいものに魅かれるのは当然としても、それを体現している物質的精神的条件——人格としての迫力のなさ、精神の保守性、現状維持的気分、未知の世界に対する恐怖心、自己保身性……etc、準支配階級的（？）性格が必ず共存し

ていることが許せなかつたのです。そんな存在から脱出しようとして格斗し続けたのが、大学入学以来の全歴史であったといえます。

私自身は支配階級に属したことはないし、そうしたグループと接触する機会ももたなかつたから、私の“憎悪”はこれまでのところ、準支配階級的なものだけに向けられてきたのかもしれません。（日時不明 3時15分Pm）

東 拘 よ り

菊屋 橋 一〇一號

先日は、逮捕以来はじめての「外界」からの便りに狂喜して、ついにとりとめのないことを書き散らしましたが、今日は少しまたじめに書きます。

山本義隆の言葉には、「われわれは、学生の特権を擁護するために斗つたことはない。青医連は、医療の帝国主義的再編に存在をかけて斗う医師の組織としてはじめて全人民的普遍性、連帯性をもつた斗いをつくり出し得た。われわれの斗いも、又、自らをかけて、教育の帝国主義的再編と対決する普遍的質をもつた斗いである。」といった内容が常にあります。私は、私たちの斗いも、又、そうでなくてはならないと心から思います。私は、永い間（逮捕される時まで）、こうした普遍的な連帯を、私達の中に築き上げようと、自分なりに努力してきました。恐らく、私と共に斗つた人々もきっと同様のことを考えておられたと思います。（実際、私たちは、殆んど話しあつていません。）

ですから、私にとつて、（恐らく他の人々にとつても） 1、18、19の斗いは、新しい連帶の決意であり、それゆえに新たな斗争への出発点であり、決して玉砕などというものではない。真の

連帶をいう行為が、私たちにとつていかに難しいかは、抑圧的日常生活の中で、そして連帶の「レ」、叛逆の「ハ」の字も見逃すことなく目を付け、引ききてきたブルジョア的人間の監視下で、あなたも充分経験されてきているし、きっと解っておられると思います。

私たちの連帶は、まだまだ、偶然的因素を脱しきれていません。こうした組織的支柱の創造と同時に（強力な）理論的支柱と（一本といわば）創造することが急がれます。これまた、非常にむつかしいのですが。

中教審「学生の地位」草案に対する加藤一郎評を読んで、つくづく狡い奴だ、と思いました。“学生の処分の次、ここが最もよくわからない。なぜ教育処分と学園追放を分ける必要があるのか……云々”（3、8 読売）「うっかり読むと、彼は学園追放には賛成でないような印象を与える言い方になつてゐる。その実、一般非行も政治的行動も同一手続で（刑事的に）処分できるしといつてゐるのに過ぎないのでです。

今日は時間です。ココデ

オワリ

（3月11日）

小生は今、精神上、肉体上、健康では上の部類に入るものと思っています。一月の催涙ガスのヤケドもすっかりなおり、今では体重も5キロほど太ったのではないから。

せん。

四月十五日東拘より

梅井義広（仮名）

工学部の斗う学友諸君、お元気ですか、救対の皆さんはじめの御活躍、本当に感謝しています。

留置所内のなかで“寒い寒い”といいながら毛布をかぶって窓の外に降りしきる雪を見ていたと思ったら、いつの間にか桜の花が咲き、ここ二三日の“バカ陽気”と、全く時間のたつのは早いものだと思います。今、房の中には中島さんの入れてくれた切花が、即席の花瓶となつた容器の中で、それこそ“香りある”季節感を僕に与えてくれています。白い壁に囲まれたせまい殺風景な空間の中にその花だけが、何やら“天然色”ともいえそうな感じです。これからますますきびしい情況になってゆくだろう僕たちとは逆に、季節が冬から春へ、そして初夏へと移らいゆくのは何か奇妙なものです。しかし考え、ふりかえつてみると、僕たちのおこなってきた斗争ほど奇妙といえば奇妙といえないものはないのだし、なまぬるい風の中で一人一人が、自らを土着性のうえに厳しくうちたてゆくその困難さをどれだけこれから背負つていきうるか、ということを考えみてみるならば、やはり、ふさわしい季節といえるかもしけません。

一日課としては、毎朝7時起床、朝食、30分の運動、11~30の昼食、4~30の夕食、5~15の仮就寝、9~00就寝という具合です。若くして中年太りにならないよう運動だけは気をつけてやっています。雨が降ると運動中止で、それこそ一日中房の中で読書のみ、ということになります。読書もいいですけど、筆記が手紙以外許されていないので、それが残念です。読書では今じっくりと昔の哲学書を読みつつ、片わらに数学の本やら、『岩の上に』などをおいています。まわりの独房の学友もマルクス主義関係の論文で、『勉強中』らしく、さながら各党派の『お勉強会』がここで開かれている様です。

外の学友諸君の調子はどうですか。いささか疲れすぎているのではないか、と心配します。焦っても何も出でこない時には、だめなんだ、という位の『悟り』の氣持でのんびりと、しかもラジカルに作業を続けていいほしと思いません。ラジカルは共に広い視野をもったものとしてあると思います。世界階級斗争という尖鋭な視点を一方に押えて、世界基底から生まれる日常性の『ことば』を包摂した思想行為……それが僕らの実力斗争を支えるのではないでしようか。『斗争勝利』と叫びつても予盾を自己の内で拡大させ、日々の『生活』に耐えぬき攻撃する僕らでありたいのです。明るい顔には常に暗い影があるように、その二つながらを見つめてゆかねばならないでしよう。捕虜の身であること、政治という黒いものの中に今いること、これは疑いありません。白くぬられたドアがいくつもいくつも続く、病院の臭いのする拘置所です。せめて時間を無駄にせぬ

様に思っているこの頃です。4~28沖縄デーをヤマとする今春の斗いの息吹きはここまで伝わってきます。しかしこのなかでも、いれば長期的な自分の斗争の戦略構築という作業ぬきにしてはすべて無です。僕らは、こんな雰囲気のなかで、何ごとかを着実にとらえてゆこうと思います。権力には僕らのときますされた憎悪を……あの血に狂った機動隊員の怒号をはるかにのりこえたやさしい憎悪を……そんな少し文学少女じみた感じがいまいえることです。

ではまた手紙します。皆様によろしく

1969・4・15 巢鴨より

分割公判粉碎！

統一公判をかちとるぞ！

東大斗争を斗いぬくぞ！

4・28 沖縄斗争を斗いとろう！

工学部合同救対 御 中

四月十二日東拘より

十一河 雄二（仮名）

加藤さん、差入れてもらった『朝日ジャーナル』今、読んでおります。九大の井上教授の文章が載っていますが僕の批判を少しばかり。

このフォイエルバッハは（キリスト教の本質の序文にこれと似たことを書いているからこう呼ぶのですが）「学問がその底

に体制批判という本性をもつ」という前提に立って、国家と対峙することによって「学問の政治的中立性」を守る「苦しみ」を勇ましくも引き受けるのです。それでこの苦しみの中にいる大学人を暖く理解してほしいと「政府」「社会」に要求し「学問とはきびしいものであり、学問の府は試練の場である」と結んでいます。

我々の東大斗争が明らかにしたのは学問の盲目性だと思います。ところがこの勇ましい Sankt Leidwig はまず学問を物神化し、自らは学問に司れる坊主として「政府」「社会」にサイ錢を要求し、学問に帰依することを要求するのです。こうした手合は経済的不平等の上に政治的平等を立て、飢えた人民が「自由に」自らの肉体を売るのを高みから見おろして論評するのです。その論評たるや現実から出発するのではなく、観念から、國家権力はかくあるべしという観念から出発して現実の警察を口先で批判するのです。ところが国家権力が人民を弾圧するのは、階級予盾の結果或いは表現なのです。原因を無視してこの結果をいかに縫合するか苦慮するのがブルジョワの学問なのですが（現代医学はその典型）このメドウーツサの首を見てしまつた我々はもはや退路はありません、石になってしまいますんですから。—— 話は変りますが「ギリシア神話」は僕の本棚にもありますから読んで下さい。もっともそんな暇はないかもしれません。—— 話がまた元へ戻りますが、かく井上教授をののした僕も実は二重構造になっているんです。観念論の上に唯物論を立てているのです（僕が家族に出した手紙

を読んだあなたには解っているのでしょうか）。

今、梅本克己の「唯物論と主体性」を読んでいます。それにについてはまたいずれ。

話はちょっと變りますが、あなたが僕の「思想の私物化」を非難したのは当つていません。手紙で展開できそうにないのをシャバに出てからサンで話してみようという積りでいます。今日は大内、坂本両君が面会に来たり、風呂に入ったりしたため二回程手紙の途中で中断があり、時間の途切れが氣分の途切れを呼び、前後のつながりがないかも知れませんが僕のせいではありません。

では又、Auf Wiederssehen

四月十一日 東拘より

十一 河 雄 一一

我らの偉大なる Sankt Max 氏に内氣なる Sancho より

筆啓上致そう。

大分陽気がよくなつた上に、ヘーゲルなぞ読んでいたせいか、最近はどうもボケーとしていたようだ。ここでの単調な生活、起きて、寝て、三度の飯（麦シャイだ）を食つて、チョコレートを嗜つたり、夏みかんを食つたり、本を読んだり、運動したり、欠伸したり、頭をかいたり、用便したり、2枚のタタミの上を白クマのように往復したり……。

Muskel の活動の貧困は僕の感性までも干らびた、振つてみるとカサカサ音を立てるようなものにすると思えば大間違いで、

ハテ去年の今頃はメトロでミルクイチゴを食っていたのではなかろうか、などと食物に関しては妄想をたくましくしている次第。

なる様相を呈しておるようだね。
Auf wieder sehen /

青梅 6 友人へ

藤 煙 正 雄

前 路

面白く話がファンストのイデオロギーを満載した読売新聞の、しかも三面記事を所々ぬりつぶしたのを見たり、ラジオを通して流れてくる汚ならしいブルジョアイデオロギーを聞かされたり、或いは犬供のいやがらせをうけ、等々に事欠かぬ毎日は、ゆるみがちな僕の気持を引き締めてくれる。

例えば、ここでのラジオ放送は未決囚の娛樂と教育のためにあるので、だから心地よい音楽番組を引き裂いて、「保護監察官の手帳」だの、「職業案内」だの、ブルジョアジーに司れる犬どもの「人生観」、「明るい社会」を築くための建設的な「私達の言葉」等々が放送され、ニュースでも「刑事案件」はすべて放送中止になる。こんなことはシャバでも日常的に行なわれていることだけども。

話は變るが最近、梅本の「唯物論と主体性」を読んでいるが、直面する問題（実践的課題）主体性論を離れてジャーナリスティックに、或いは觀念的なカタキスムスとしておしゃべりしてもしようがない。ということは東大斗争を終始一貫してサポートした僕にとって実り豊かな問題にはなり得ないが、

Sankt Max 氏の説を聞きたい。即ち自己批判を要求する。
ところが Max 先生、尾崎が大変肥っていたという話だが、小生 Sancho も少しばかり肥ったことを知らせておく
老いたる少年は最近ヒゲを生やしておって、ヒゲ中顔だらけ

君がバリケードの中に、あらゆる社会形態を超えた普遍的意味を見出していることに同感である。ぼくの手紙はそれをふまえて書いたものと了解してほしい。

しかしながら、君が未だに実践を人間の「類的行為」と規定するところに、果して君が自己否定しえたか疑わざるを得ない。君がフォイエルバッハ的な形而上の唯物論にとどまり、階級斗争を認識しないなら、まさしく君の嫌悪するロマンティシズムへ陥らざるを得ないであろう。その事はまた君がひたすら「自己の醜惡を直視し、恥じる」云々にも感じられる。君のバリケードの位置づけの迫力のなさは、またバリケード斗争に対する認識を不明確にしている。

我々は「大學」を一切の抵抗に抗じて「バリケード」と成さねばならない。

自己否定を超え、自己を肯定せねばならない。

君も多分、フチブルとしての将来の自己を想定していると思うが、プロレタリアといかに共闘するか、そのことが真索されないなら、まさに東大斗争は市民社会の一風物誌と化すであらう。

四月一九日

四月十六日 福島大

高橋信康（仮名）

前略

「統一公判に向けての方針について」拝読いたしました。ぼくの考え方をお知らせします。

歴史的な闘争を担つた者が、その一方において、國家権力の側に屈服することは何としてもできません。

統一公判への道は、確かに多大な困難と痛苦を要求するでしょうが、内外の連帶と团结で、それを克服するしかないと思います。論理的に考へるなら、統一公判について我々には選択の余地はないと思います。「……するしかない」のです。

ぼくは、長期勾留もハシストもその他の屈辱的な仕打ちにも頑張りたいと思います。まさに「九死さすして挫けることを拒否す」です。

四月十日 小管
野上幸二（仮名）
前略

とにかく、ぼくは頑張る決意です。
「外で活動した方が……」というのは結局日和見だと思いまます。なぜなら統一公判をカチトル闘いの意義は、「外での活動」などとは比べものにならないほど大きいし、そしてこの闘いは、ほかならぬぼくら以外にはできないのですから。外の皆様の御健闘を祝います。それでは右お知らせと決意まで

四月十六日

統一救対殿

草々

結果的にそうなったとしても、その場合には、別の内容豊富な成果が与えられるでしょう。統一公判をカチトルこの闘いは、「パリ・コンミューン」みたいなものかもしれないけど、パリ・コンミューンは計りしれない成果と教訓を人類に与えたと思います。こんなことをいうと、コンミューン戦士が怒るかもしれませんね。「一緒にしてくれるな。」といって。

僕が警察で取り調べをうけている時は、目の前に現実の権力があつたので、僕としては比較的気分が楽でもたが、この小管の独房で気分がおちついてくると、実際に僕に敵対するのは、現実の権力そのものではなく、僕自身の心の中にあるブチブル性である事に気付きました。
もちろん現実の権力に対して断固とした闘いの姿勢を放棄するわけではありませんが、僕自身が常に意識的に否定しようとしてきた自己のブチブル性が最も大きな敵だと思うのです。

実際の問題として、解放講堂に残った事で自己を正当化しようとする気持が働いた事も確かです。

このようなうわついた気持をしっかりと土台に結びつけてくれるのが、「進撃」をはじめとする、その後の闘争報告や救対の活動、それに僕自身も最も大きな欠点であった原理論を書物を通じて勉ぶ事であると思います。

僕の気持は、けつして何ものにも負けないほど、強いとはいえないでしようが、今後の法延闘争や全国学園闘争、そして日帝打倒の闘争を通じて、さらには古典の学習を通じて、一層の自己変革を行なってゆきたいと思います。全国学園闘争の最先端を切り開いた部隊としての東大、日大全共闘の役割は今後も重要な役割をなっています。

一層の運動の深化と固い連帯の為に、救対活動のさらなる強化を望みます。では又

同志社大学
野 上 幸 二

渡辺 三津夫 殿
追 伸

先日の、勾留理由開示法延において、判事が我々に対する不当な勾留を次のような言葉で認めています。

「被告に対して証言をした者に、被告が有利な証言を頼むおそれがある。」と

これが罪証イン減のおそれでない事は明らかですので僕がその旨を質問したところ、「それは確かに偽証として別問題であ

る。」

僕自身の気持にたかぶりがあったため、これ以上追求できなまま閉延宣言をされてしましましたが、審君から差入れのあった「勾留取消し請求」にその旨書いてありました。

一九六九四一〇

四月十二日 中野

東田洋一（仮名）

「救対」殿

お忙しいことでしょう。今救援される身となつてみなさんの活動には、ほんとに頭が下がる思いがします。ごくろうさまですけれど、弱いぼくらにとって救対の存在とその活動はかけがえのない力となってくれます。今後とも、がんばって下さい。

ぼくは留置場は田無だったのですから、あそこで水戸さんを中心につい分よく面倒みて頂きました。昨年迄は、ほんの自己の良心のナクサメのために、わずかのカンパしかして来なかつたことを反省しています。そして、こちらに来てからは弘前の仲間が献身的に面倒みてくれ、そしてぼくらの存在故に弘前に於ける闘いが育ちつつあることを聞かされて、非常な感激でした。

きよう、ベンをとつたのは、みんなに感謝と連帯の意を表わしたいのと、それから、過日のパンフによると、再度保釈申請をして頂くようですが、それについて一言。既に連絡は、いつている筈ですが、ぼくは少々、神経が犯されて定調ではあ

りません。こここの医者の話によると、「軽い神経症」だといふことで、弁護士の要請があれば診断書は書くけれども、そうとしか書けないだろう。ということです。神経症による保険は無理だろうというような口ぶりでしたが、保険申請をして下さる際、一応、その点を考慮して下さるよう、お願ひします。

先日、母からの便りによると、救対より手紙をもらつたとあります。が、あまりモノワカリのいい両親ではありませんので、和らかい調子で今後ともよろしくお願ひします。

ぼくとしては、健康の許す限り、統一公判へがんばるつもりでいます。そして、外の闘いがやはり気になつていています。

どうか、がんばって下さい。

一九六九 四一二

中野刑務所にて

東田洋一(田無2号)

府中だより その2

大里洁秋

です。

きょうは思いつくままのことをいくつか書きつらねるつもりです。

皆さんから差入れてもらった雑誌類、ひまにまかせて読むのですが、とくに東大斗争に関連した文章には学ぶべき点が沢山あるように思います。折原さんの一連の論文(中央公論四月号)は、同誌佐藤忠男の「大学をことさら理性の府とみなしている点で折原は大河内と五十歩百歩だ」という指摘を尊重しつつも、

やはり注目しなければならないと思います。最近では講義の拒否宣言を発表したとか、ぼくは東大斗争のあいだに何人かの教官の悩み苦しみかつ行動に参加した過程を見つめることができます。しかし、しつような思考と誠実さにおいて、現在表面に現われた教官のモラルとして群を抜いているように思います。

藤堂先生のお考へは現代三月号で拝見致しました。日頃「常識」における教授の堅苦しさに、極めて自然な形において程遠い心の広さと、学問に対する厳しさを自分にも他人にも要求なさっていることを尊敬していましたし、特に十二月二日の「人民裁判」における先生のお話には、ぼくのちっぽけさがはずかしくなるほど心を打たれました。しかし、「現代」の文章には、その何分の一の同感しか共有できませんでした。雑誌社の方針のためか、まとまつてはおらないお考へを短期間に書きついだためなのか、先生の働きかけるべき、起きあがつていなない教官への呼びかけにしろ、民青への批判にしろ、有効なものにはなりえいないと思います。学問上の経験とこの間体験されたことをおりませたとてもわかりやすい文草をお書きになつており、具体的にこれから責任をしよいこんだ形で行動を開始されたことに双手を上げて賛意を称しますが、まだまだぼくらとけんかして修正し合つてゆく面を露わにして下さったようです。

他にいくつかの知識人の「労作」読みました。賛成したことのも、よく意味のとれないことも、あるいはまるつきりつまらないことも含めて、あまり強い印象は残りませんでした。中にのめりこんだ文章との違いが、あるいはぼくの読む際の心構えに

あつたのかも知れませんが、一時的なラッシュとも思える「大學紛争特集」は当時者のものでない限り、面白いものをバッサリと裁断しながら、ピックアップして読み進む以外、時間と思考のロスのように思います。

さて展望四月号の座談会はとてもよかったです。それは、すっかりマスコミ受けしたノンセクトラジカリリストを各科別の院生でうまく配列したところにあるのですが、発言者の一人一人がセクトの紋切り型と違って、それぞれの立場で腰をすえ考え抜いたことを（おそらく）率直に言いえているのであらうことには多くの学ぶべき多くがありました。それは中公四の院生の発言にも共通することですが、緊迫した現実の充実感と同時に、ウォーンとうなりのた打つほど苦しんでる自己の生き方を示しているように思え、好意をかったのです。

ただぼくは、自他共にノンセクトラジカストの名声をほこっている限りにおいては、どうしても長期的には信用おけない。

「ノンセクト」であることの意味を彼等はどうつきつめているのだろうかをたずねてみたくてしようがないのですが……。試行錯誤の上に持続した東大斗争が、今や関西の各大学において受けつがれ、斗われていることを遅まきながら知ったのですが、「帝大解体」という、ぼく自身かなり漠然としてしかとらえられていなかつたスローガンが東大においても、他大学においても正面に目をそえるべき課題となつていて、今後、自分でも考えていきたいし皆さんと学んでいきたいと思います。

皆さんへ

3・29

四月十四日 H君書簡

S・H（東大経院）

現在、経院の状況はかなりピンチのようですが、それは問題が“妥協”か“徹底抗戦”かという二省挙一として現出している点にあると思います。永続スト続行の論理は、帝大解体の質を落すことなく継続するためには斗いを対権力斗争に向けねばならぬ従つて旧日常性への復帰はないということらしいですが、僕に良くわからないのは何を具体的目的としてストを続けるのかということです。帝大解体まで？権力奪取まで？我々は今革命的空語を語つてはならないのです。よく現実を見てほしい。階級情勢と学内情勢はどの方向へ動きいかなる力関係にあるのかを。我々の斗いの第一ラウンドは勝利したのでしょうか？僕は残念ながら彼我の力関係は余りにも大きく、力でねじふせられたというしかありません。敗北です。

永続ストの立場はかかる情勢をどう見ているのでしょうか。なぜ“永続スト”なのでしようか。はつきり言えば、再度の研究室封鎖・バリケード斗争でない限り我々だけがストをしてもう受けつがれ、斗われていることを遅まきながら知ったのですが、「帝大解体」という、ぼく自身かなり漠然としてしかとらえられていなかつたスローガンが東大においても、他大学においても正面に目をそえるべき課題となつていて、今後、自分でも考えていきたいし皆さんと学んでいきたいと思います。

にもかかわらず斗いは進めなくてはならない。それは東大斗争

争、旧日常性を全面的に問題とし、我々に新たなる視点にもとづく解決をせまっているから。帝大は解体されねばならないのです（現時点では「できる」のではない）。現在我々に必要なのはかかる高度な質をさらに「安保」「沖縄」をも含む中ではつきりと見据えつつ、この困難な東大テルミドールを根底からくつがえしてゆくという姿勢と視点であろう。「帝大解体＝安保＝沖縄」という質、いわば一般性なり全人民的普遍性といつてもよいが、これを自己の中にはつきりとり込み、東大における、具体的には経院における「新七項目」を斗ってゆかなければならぬ。個別性（改良要求）→一般性→という視点。竹内芳郎のコトバでいえば永遠の「拒否」を発しつつ「改良」をいかに行なうか（「大学闘争をどう受けとめるか」）、ローザのコトバで言えば「改良も革命も」（「社会改良か革命か」）である。「新七項目」を新たな視点による「改良」としてかちとつてゆく、これが今の方針だと思います。

このような斗いは現下においてきわめて苦しい困難なものとなりましよう。だからこそきびしい「個としての主体」を確立せねばならない。旧来の学問研究のあり方の根本的問いかえし、就中我々は、宇野理論的知識人像を、理論的にも実践的にも止揚しなくてはならない課題を負っている。そのためには宇野理論の思想史的位置づけ、科学とイデオロギーの分離論の原理的再検討、実践概念のとらえかえしながらのシヴィアに問われねばならない。これらのこと、研究科委員会との対決の中でそ上

にのせられねばなりません。

僕がいいたいのは、革命的立場にスッと身を移しかえたり、ロックアウトに恐怖したり（絶対ありえないと思う）することなく、自分は何なのか、今後どうしていくのかを、東大斗争の提起した問を中心に徹底的に問いつめることを通じてでしか困難をきり拓く道はないのだ、ということです。（中略）

我々は今、自己の旧来の発想法、生活方法、研究方法を一つ徹底的に対象化し再検討せねば、再びあの高い道義性と論理性はかく得できないであろう。

S・H

四月一日 東拘より

水上 26号（完黙）

母の件、通常の文化史的意味での「父」の崩壊につぐ「母」の崩壊という問題がひとつ。他に小生のような極貧層出身の子弟には、特に大きな問題として、帝国の忠良なる臣民としての家族（つまり、宗教としての「僕」）をたてることによつて、彼らは、現実的には忠良なる臣民として、日々帝国をぬりかためている）、つまり疎外態としての家族というものの崩壊。もつとも資本主義社会における疎外態としての家族という視界からは問題はひとつになるけど。「父」ないし「政治的頂点」としての国家権力との対決と同時的に社会的基礎においては、その原基的な細胞たる「家族」との訣別が僕の場合には不可分なものとして進行していた次第。彼らが貧困であればあるほど、隸属の度が激しければ激しいほど、「神」たる僕における「非人

間的な」苦惱は大きい。程度の差こそあれ、「帝国大学学生」にとっては共通点があるはず。「自己否定（？）」といつてもこの下半身まで問題にするのでなければ、この階級社会の泥沼の上澄みをかきまわしているにすぎない。もっとも中産階級（あるいは小市民（？））出身の諸君の場合は、家庭との関係はもっとカラッとしたもので、単に訣別すれば足りるのだろうけど、僕の場合は屠殺という形を必要とした。分業と私有財産の秩序を前提とした上の小市民的結合（一社民、スターリニスト）からの自立は僕の場合、このようにしてはじめて可能だった。なお、夢を見たのは、検事の恫喝と懷柔のあった夜のこと。

したがって、彼女との接見はもちろん金品の差入れ等一切拒する。まことに善良な母親というティでのこの出かけてきてもつはあるのみ。この資本主義社会という人狼とべとべと野合していた父母にのろいあれ！不安と絶望を彼らに！破滅を帝國臣民に！彼ら臣民の発狂の高笑いは帝国の弔鐘である。善良なる「おふくろ」が、勇猛果敢なる「帝国の兵」を育てたのである。「母」なる家族と「父」なるブルジョア国家に、文字通りの「死」を与える。私はそれによってのみ生きるのみ生きるのであろう。書籍差入れの件A「家族論」（ないし婦人論）国民文庫？B「ヘーゲル批判」（新論社、マル・エン選集）C滝口氏著作（複数）。一度に三冊しか入らないそうだからA・B各一、Cのうち一を次に入れてもいいのだが……。「反帝」の諸氏に→資本主義社会において家族がどのような意味で

疎外感であるかということについての「集中的な叙述」がどこにあるか教えて欲しい。もし、わかつたら、「経・哲・ド・イ」等以外で。まあ殆どわかっているつもりなのだが、典拠が欲しい。

四〇のつぎでもよいが（止むをえずこちらが先でも良い）朝日ジャーナル1月19日号（最首氏の文掲載）入れて欲しい。他に江藤淳「成熟と喪失」……中略……七一〇一についてもつ具体的に多面的に論じる作業を進めている。「俺は俺だ」主義者にもそれをもって攻撃を加えるであろう。乞御期待 呵々大笑

東大斗争とは、何か

都 市 信（仮名）

東大斗争前夜 A SI 12B これが君の「ホーム・ルーム」。理科系、理I・I君は「前途多望」の「秀才」。線型代数だろうが量子力学だろうが、君は「秀才」なんだ、こいつをのみこんでどこへなりとも行きやがれ！

「花」の五月祭、「霧にむせぶ」駒場祭、君と寄りそう流行のモードに身を包んだミニの女子大生は「秀才」君の、せめてもの「抵抗」か。コンペではでにワイ歌をどなるも何故ぞ。いいじゃないか、いいじゃないか、気にするなよ、ガチヨン。人、人、人。女の白いすね。ミニのもも、黒いストッキングのなまめかしさ。朝夕の満員電車、疲れる？でも、なかなかセクシーな感じじゃん。ウッショッショ……。

東女のいかずネエチャンと合ハイ。嬉しいな、嬉しいな。

チエツ、バスばかり。おー いいのもいるな。あの娘、引つか
けようかな。

ああ、先を越された。畜生、今に見ていろ、俺だつて。

君、君、「秀才」君。いい加減にして、さあさ、乗り遅れち
やダメ。理物それとも生化。いいの、いいの、どこえ行つたつ
て東大理Ⅰは東大理Ⅰ。このラベルさえあれば、大丈ビ。
さ、乗り遅れないで、足もとに気をつけてネ。

一九六八・六・一七 月曜

まだ、よく分らない。機動隊一二〇〇、本日未明時計台封鎖
解除。誰が何故、時計台を占拠していたのか。何故、二日後に
突然制服が一二〇〇も来なきやならなかつたのか。

待てよ。こんな情景はどこかで見たぞ。そうだ。あれは去年
の十月、羽田。今年の一月、佐世保。王子、成田。

ここには、何かある。何かが。日常の不気味な憂鬱とは、全
く異質の何かが。

八編 集後記

☆東大斗争への猛烈な弾圧によって、三ヶ月以上経た現在なお、五〇〇余りの斗う同志が不当にも勾留されているという事実、罪名はおよそ「帝国主義大学解体未遂罪」、「産協路線粉碎未遂罪」などといわれるものであり、にもかかわらず、彼らが断固斗い抜いているということは勇気付けられる。

そもそも人間が「社会的関係」の中に生きる動物であるとするならば、個々分断され、タタミ二枚の独房の中で飼育されたりといふ事実は、現代の極限状況の中を彼らが生き抜いているということを示している。

すなわち、「ここで単調な生活、起きて寝て、三度の飯

（麦シリヤリ）を食べて、チヨコレートを嗜つたり、夏みかんを食つたり、本を読んだり、運動したり、欠伸をしたり、頭をかいたり、用便したり、二枚のタタミの上を白クマのように往復したり……」であり、その場所は「白くぬられたドアがいくつもいくつも続く、病院の臭いのする拘置所」であり、「あと一年も入つてしることを考えると気が狂いそうだ」というある友人の「告白」が重く重くぼくの上にのしかかる。

☆しかし、この極限を現在生きている同志の手紙を読んでいるとと、とにかく「生き生き」していることを感じる。しかもこれこそが真のアジテーションであると感じるのはぼくだけだろうか。アガサは「他者の心を動かす一感動させる」の意であり、それはそれを発する王体が重い重いこの「現実」といかに闊れつてゐるか、ということを上半身からだけでも、下半身からだけでもなく、全身から語りかけてはじめて、他との間に成立するものであり、彼らの手紙が眞のアジテーションであると云えるのはその事実を物語つてゐる。「極限を生きてはじめて言葉

は重みをもつてくる」

☆「獄中書簡」を編集することの危険性。それは、ぼく達の（ぼくの）出発点が、今までの全共斗出版物に対する一定の批判をもつて企画を推めたこと、彼らのことを「評論家」と決めつけたぼく達（ぼく）の立場を再度確認するとともに、彼らと同じ穴におちこむことをぼく達は拒否する（ましてや「マスコミ」）に獄中の同志を売ろうなどとは毛頭考えていない。

拒否するという行為は、ぼく達一人一人が現在の東大斗争の重さを担いきることによってしか獲得されないものであり、それを担いきることをぼく達は決意し合つてゐる。（真崎）

お知らせ

獄中で斗う同志との公開文通の場として、毎週一回発刊の予定です。今回掲載の手紙に対する感想・返事などがありましたら、真崎宛にお送り下さい。

なお、獄中同志からの手紙をお持ちの方は連絡して下さい。

第一版	四月二一七日	印刷発行
発行者	「獄中書簡」発刊委員会	
委員長代行	加藤二郎	
▲連絡先	文京区向丘1の12の7	
東大追分寮内	(811)二二三六八	
真崎猛哲		